

2. 漆喰遺構の保存処置

はじめに

彦根城表御殿跡の発掘調査において、当時の表御殿を復元するうえでの数々の貴重な遺構が出土している。とくに能舞台下の升状遺構や舞台に通ずる橋掛り下の共鳴施設、さらに大小の池、井戸、導水管などの水を利用する施設など漆喰を使用した遺構が数多く検出された。また御休息之間の縁下では、赤色顔料を混入した鮮やかな漆喰で塗り固められていた。

発掘調査の進行に伴いこうした漆喰遺構が次々と検出されたが、当初良好な状態で発掘されるものの、発掘調査の途中で地下水による湿潤と直射日光による乾燥が繰り返され遺構の表面より粉状化し、次第に崩壊することが懸念された。そこで発掘調査に支障をきたすことのない様にこれらの現象をできる限りおさえ、かつ現状を維持するためにも漆喰の強化処置を実施することになった。ここに彦根城表御殿跡における漆喰遺構の保存処置についてその施工を中心に述べる。

漆喰遺構の劣化状態

升状遺構や橋掛り下の共鳴施設は、その基礎構造が堅牢で漆喰の層も厚く造られていることから大きな亀裂はみられない。しかし、表面で粉状化が進んでいる。池や井戸においては、地下に埋没している部分については著しい劣化はみられず、発掘過程で露出した部分についてのみ漆喰の粉状化が生じ、これに続き一部崩壊がみられた。

縁下に貼られた赤色顔料を混入した漆喰の構造は、荒目の砂を混入した漆喰を下層に置き徐々に細かい粒子の漆喰を塗り重ねている。部分的に遺存している赤色の漆喰層は緻密で表面は滑らかであるが、乾燥によって粉状化が進み見かけ上白っぽく変化している。さらに乾燥が進めば漆喰の各層から剥離が生じ、一層崩壊するおそれがあった。

強化処置の方針

同遺跡にみられる漆喰の遺構は広い範囲にわたっており、しかも全体の遺構と密接な関係を保っている。小規模の遺構や遺物の場合は保存のため遺構から取り上げて単独で強化処置等の実施も可能であるが、こうした遺構は切り離すことはできない。また、発掘調査後の埋めもどしによる保存が検討されていたことから現状のまま遺構の強化を図ることにした。

劣化した漆喰の崩壊を防止するためには強度を高めることが必要で、これまで遺構や石造文化財の強化に使用され実績のあるイソシアネート系合成樹脂（商品名：サンコール SK-50）を選定し使用した。同樹脂の濃度は5%程度に希釈したものと



写8 能舞台下漆喰升の保存処置

数回遺構に直接塗布ないし散布することによって含浸し強化することとした。

この方法は、漆喰遺構の内部に樹脂を含浸することで強化をはかるもので、従来から窯跡の保存などに用いられ効果を得ている。また、漆喰遺構の効果的な強化処置には、接着剤である樹脂を充分浸透させることが必要で、漆喰に含まれた水分をできるだけ取り除くことが必要とされた。なお、遺構の保存処置にあたっては奈良国立文化財研究所の指導を得ることとし、施工は近畿ウレタン株式会社がこれにあたった。

強化処置の実施

効果的な強化処置を施すためにはまず遺構ができるだけ乾燥させ、次いで遺構の強化に必要とされる適量の合成樹脂を注入することが必要である。面積的に最も広い能舞台下のいわゆる升状遺構については、イソシアネート系合成樹脂を表面より散布し漆喰内部に充分含浸させた。また、井戸については、涌水にたいして排水用ポンプを作動し、施工時に乾燥状態に保つことを心がけた。縁下に貼られた赤色顔料を混入した漆喰遺構については、できるだけ内部に合成樹脂が浸透するように、樹脂の塗布後ポリ袋で表面を覆い溶剤の揮発をできるだけ防ぐ方法を取り、表面での樹脂の高濃度化を避けた。

合成樹脂の散布ないし塗布による処置は、いずれも同じ遺構で数回繰り返して実施した。強化処置が施された遺構は、処置後において発掘調査中の崩壊を回避でき、その処置が有効であったことが認められた。

まとめ

遺跡の発掘調査によって次々と現れる遺構や遺物は、それぞれの地理的環境に応じた平衡を保っており、覆われていた封土が奪われることによって風化や劣化の速度が急激に増し、貴重な資料が損なわれる危険性が常時つきまとっている。すなわち、長期間にわたる遺構の検出や調査の作業において、崩壊の危険のある遺構や遺物に対して、その性質と状態を把握し的確な処置をとることが大切である。



写9 御休息之間縁下漆喰遺構の保存処置



写10 御休息之間の各漆喰遺構の保存処置

表御殿跡の漆喰遺構においては、地下水の豊富な場所で平衡を保っていたものが発掘調査により地表に出て、その平衡を崩し崩壊が危惧されたため応急的に遺構強化の保存処置を実施したものである。また、この処置が後の恒久的な遺構保存のために非常に効果があった。現在、表御殿跡は発

掘調査の終了にともない、その遺構は全面的に埋めもどすことにより保存されることになった。現在その遺構上に彦根城博物館が建設されている。

遺構の現状保存を前提とした場合においても、劣化ないし崩壊の危険のある箇所の理化学的な保存処置の施工例は多くみられる。保存に至るまでに長期間を要する場合は、こうした保存処置の施工を検討することが望ましい。また、施工において技術的な問題点も多くあり、技術開発を含めた研究も同時に進めて行く必要がある。